様式３

令和5年度　自己評価表

鳥取県立米子西高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	多様な価値観を尊重し、主体的に生きる力を育み、持続可能な地域を創造する人財の育成を図る。

今年度の重点目標	
	1　主体的に取り組む態度・思考力・実践力の育成 2　他者を認め、人とつながる力の育成 3　地域を知り、地域に参画、寄与しようとする力の育成 4　働き方改革の推進

年度当初					評価結果（　月）		
評価項目	評価の具体項目	現状（R4年度の状況）	目標（R5年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1　主体的に取り組む態度、思考力の育成	授業改革の推進	・１年次生では、意欲的に学習に取り組んでいると答えた生徒は93%あった。 ・１年次生では、朝の連絡やその他の情報共有を日常的にClassroomで発信した。 ・コロナ感染拡大でリモート授業や生徒が対面かリモートを選ぶハイブリット授業を実施したところ、リモート選択者が多かった。 ・授業での活用頻度はまだ高くないものの、アクティブラーニング推進研究授業で、授業の中でのChromebook活用事例を研修した。	・授業研究会の質的向上とICTの活用を推進し、授業スキルの向上を図り、主体的・意欲的に学びに取り組んでいると答える生徒が90%以上になる。 ・Chromebookを活用した授業が実施されている。	・ICTの授業利用を効果的に活用するために、教科内の情報共有を推進する。 ・ハイブリッド授業では、教材の持ち帰り、リモート参加者の指定方法、双方向の授業参加などの徹底等ルール作りを行う。 ・効果的なChromebook活用法を教員間で共有できる機会を作る。 ・生徒の創造性や論理的思考力を養うための研修会等を開催する。 ・授業アンケートを実施し、自らの授業を振り返り、授業力の向上を図る。			
	みらいチャレンジ活動の充実・発展	・１年次後半から取り組めるよう年間スケジュールを作成し、グループ活動を中心に他者と意欲的に意見交換するなど、成果を上げた。 ・２年次生での夏季休業中に事業所訪問、大学研究室訪問を通じて課題を明確にし、２学期の探究活動につなげた。 ・２年次生のマニュアル『課題研究メソッド』がやや難解だった。 ・教員の中に自主的なみらいチャレンジ活動充実に向けての研修グループなどもできた。 ・３年次生では進路志望別に活動し、志望の確認につながるなど成果を上げた。	・地域の資源を活用した多様な教育活動をとおして、主体的に活動できる力が身につく。 ・２年次生の学習前と学習後の自己評価の肯定的変化が80%を超える。	・２年次では地域にでかける機会を確保するため授業変更を行い、半日程度校外に出やすい日を作る。 ・ハイレベル講座（県教委事業）を継続し、プレゼンの効果的な発表方法の習得を図る。 ・事業所訪問等の経験を通し、課題解決学習を深堀りするよう担当教員との連携を密にする。 ・『課題研究メソッド』の改善を進める。			
	進路指導の充実	・国公立大学総合型・学校推薦型選抜の合格者２１名。 ・国公立大学現役合格者数が、６１名・難関私立大学現役合格者１７名であり、目標を達成できた。 ・総合型・学校推薦型入試の取り組みについて、教員間の意思統一が不十分だった。	・国公立大学現役合格者60名 ・難関私立大学現役合格20名	・小論文指導・面接指導は現行体制を維持し、進路ガイダンスは同様な形式で実施する。 ・本人にどの入試方法が向いているのかをよく見極めさせ、安易な受験方法にならないように指導していく。 ・企画推進部と進路指導部・学年団が連携を深めてプレゼンテーションやグループディスカッションに取り組めるようにする。			
	学習習慣の定着	・６→９月の家庭学習時間調査の結果は、１年次97.5→114.6分、２年次120.5→142.2分、３年次127.3→141.2分であった。 ・成績不振生徒(のべ47名)へ、教科面談シートを使って面談を行った。 ・学習記録表の集計をもとに、保護者懇談等で客観的な数値に基づき指導でき、学習習慣確立の一助となった。 ・感染症等の出席停止等によりリズムがつかめない生徒もいた。	・「学習記録」を実施し、学習習慣定着に役立たせる教員の指導が容易に行えるようになる。	・課題を課すことだけでなく、生徒が自主的に学習できるような声掛けや働きかけを、学校全体として取り組んでいく。 ・学習記録などをもとに生徒面談を行い、個々の生徒に合わせた学習指導、進路指導を行う。 ・学習時間調査は手書きとフォームとの併用を実施する。 ・日常的に学習に対する強い動機付けを行っていく。			
2　他者を認め、人とつながる力の育成	基本的生活習慣の確立	・年間１回までの遅刻回数の生徒は全校で８５％であった。 ・挨拶やルールを遵守するなどの基本的生活習慣が確立している生徒は多く、清掃活動等については概ね良好である。 ・スマホ依存・ゲーム依存の生徒で学習と生活に支障をきたす生徒もいる。 ・自己肯定感の高まりを感じる生徒は６８％であった。 ・いじめアンケートを年に２回実施している。	・年間の遅刻回数が１回以下の生徒の割合が90%以上。 ・自己肯定感の高まりを感じる生徒が80%。 ・いじめを早期発見し、いじめの解消に努めている。	・スマホの使用に関し、生活アンケートを通して使用における意識づけにする。 ・学校生活を送る上で基本的生活習慣の大切さを意識させ、様々な場面において自主的に行動できるように働きかける。 ・いじめの早期発見に努め、組織的に対応する。			
	部活動の奨励	・運動部全国・中国大会以上２１競技、文化部全国大会６部門出場。 ・１年次生は、積極的に部活動に励んでいる生徒が多く見られた一方、早い段階で退部した生徒が多かった。 ・全体として、コロナの影響もあり十分な活動ができなかった。 ・学業との両立ができていないような生徒も見受けられる。	・運動部全国・中国大会20競技以上、文化部全国大会5部門以上出場 ・人前で発表する経験が得られる。 ・学校外のコンテスト等への応募者、参加者を増やす。	・部活動が継続して実施できるよう支援する。 ・各部署が連携して、学業と部活動の両立できない生徒の把握と指導に努める。 ・感染症対策を徹底し、効率よく意欲的な活動ができるように計画を立てる。			
	外部講師の活用	・卒業生や、社会人の講話から、将来を具体的に考えることができたり、人権教育講演会で人権学習を充実させることができた。 ・社会人講話では、７月に１１名の講師で開催した。 ・コミュニケーショントレーニング、ストレスマネジメントや性に関する指導講演会を実施し、自分自身を振り返る機会を得た。	・外部講師から多様な考え方や生き方、最先端の技術等を学ぶことで、社会の一員となる意識が身についたと回答する生徒が70%以上いる。	・大学生の講師数を増やし、大学の学びについて情報を得る機会を作る。 ・講演の目的（ねらい）について、教職員等の共通理解を一層進め、講演後の学習や指導の充実を図る。			
3　地域を知り、地域に参画、寄与しようとする力の育成	地域資源を活用した教育活動の推進	・探究学習で、職場や大学に直接出向くなど、イベントを企画、運営して効果を上げた。 ・２年探究において、米子市役所職員のサポートを受けて探究活動を進めることができた。また、事業所訪問として、多くのグループが米子市役所を訪問するなど、連携を深めた。	・みらいチャレンジ活動において、年間5回以上の連携を米子市と図り、生徒の地域理解が深まる。	・1年次の探究活動においても米子市と連携し、探究活動の充実を図る。 ・今後もさらに地域の事業への参加の呼びかけを実施し、学校以外での出会いや学びの場を増やす。			
	学校の魅力・特色の情報発信	・ホームページの更新及び動画掲載が少なく、学校のアピールが少なかった。	・情報発信の強化、特に生徒の声や活動を発信している。	・「翠燦く」など、学校行事を録画配信できるようにする。 ・部活動の成績や大会報告を積極的にホームページに掲載する。			
4　働き方改革の推進	時間外業務時間の削減	・ＡＩ採点を取り入れて業務を軽減し、採点後の授業充実に成果を上げている。 ・時間外勤務超過者は減少してきているが、部活動に由来する超過勤務者が固定化されている。	・時間外業務時間月45時間、年間360時間を超える勤務者の解消。	・ＡＩ採点を効果的に活用していく。 ・月に時間外勤務が30時間を超えることがない部活動計画の提出と実践を求める。 ・行事、会議の精選によって業務の効率化を図る。			

評価基準　A：十分達成〔100%〕　B：概ね達成〔80%程度〕　C：変化の兆し〔60%程度〕　D：まだ不十分〔40%程度〕　E：目標・方策の見直し〔30%以下〕